「特別の教科 道徳」の特質を生かした問題解決的な学習の在り方
― 指導方法の比較検討を中心にして ―

木村　隆史（豊島区立豊成小学校）

１．研究の目的
（１）研究の背景と意義
①　道徳の時間の指導方法をめぐる状況

我が国の学校教育に道徳の時間が特設されて約６０年となる。これまで道徳の時間は、学校における道徳教育の要として、各教科等における道徳教育と関連を図りながら、計画的、発展的な指導によって全教育活動における道徳教育を補充、深化、統合し、子供に道徳的価値の自覚や生き方についての考えを深めさせ、子供の道徳性を養う役割を果たしてきた。

しかし、その一方で、道徳の時間について様々な問題状況が指摘されてきた。例えば、「道徳教育の充実に関する懇談会」は、その報告書「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）」(2013)（以下、「懇談会報告」という。）の中で、道徳の時間について「地域間、学校間、教師間の差が大きく、道徳教育に関する理解や道徳の時間の指導方法にばらつきが大きい」「道徳の時間の指導方法に不安を抱える教師が多く、授業方法が、単に読み物の登場人物の心情を理解させるだけなどの型にはまったものになりがちである」などと指摘したり、「中央教育審議会　道徳教育専門部会」は、その答申「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」(2014) で「道徳の授業については、特に小学校高学年や中学校において課題が大きいことが指摘されており、その改善のためには、児童生徒の発達の段階を踏まえ、内容や指導方法等を適切に見直すことが必要と考えられる」と述べたりしている。

②　授業改善の方向性

これらの課題を改善するため、各種改善策が提唱された。その中でも「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」は、その報告書「「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）」(2016)（以下、「評価会議報告」という。）で「今後、道徳科の指導については、その実質化を図るとともに質的転換が求められるところであり、そのためには、以下のとおり、質の高い多様な指導方法の確立と評価の工夫・改善を行う必要がある」とし、質の高い指導方法の例として「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」を提示した。学校現場では、この３つの質の高い指導方法が大きく注目され、授業改善の考え方の中核となる様子を見せている。

この３つの質の高い指導方法の中で「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」は、昭和３３年の道徳の時間の特設以来、青木孝頼をはじめ、多くの学者や教師がその指導方法について研究や開発をしてきた。また、「道徳的行為に関する体験的な学習」も、江橋照雄などが役割演技の道徳の時間における効果的な指導方法を提唱してきた。しかし、「問題解決的な学習」については、板橋雅則（2015）によれば東京教育大学附属小学校（現在の筑波大学附属小学校）など一部において「道徳授業における問題解決学習」として研究がなされたものの、道徳の時間に問題解決的な学習は適さないとの声が根強く、大きく広がらなかった。

このような状況の中、平成３０年度から小学校段階で「特別の教科　道徳」が全面実施さ

れることに伴い、子供が主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）としての学習に取り組むための指導方法として、「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」（2015）において「登場人物の心情理解に偏ったりした授業展開とならないようにするとともに、児童が道徳的価値を自分との関わりで考えることができるように問題解決的な学習を積極的に導入することが求められる」と示され、問題解決的な学習の必要性が強調された。

③　「問題解決的な学習」に関する多様な指導方法の混在

このことにより、ここ数年の間に各地域や各研究会、複数の研究者が問題解決的な学習に関する多種多様な指導方法を新しく提唱し、学校現場には多様な指導方法が混在している。多様な指導方法が存在すること自体はよいことであるが、あまりにも多種多様であり、それぞれの特性やメリット・デメリットが十分に明らかにされていない。そのため、教師からは、問題解決的な学習を取り入れたいが、どの指導方法で授業を行えばよいのか分からないといった声も聞かれる。教師が今、必要としているものは、問題解決的な学習を授業に取り入れる際の指導のスタイルや方法、そして効果や利点などを知り、確信をもって授業に生かすための指針であろう。

そこで、「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」の３つの質の高い指導方法の相互関係に着目しながら、教師が「特別の教科　道徳」の授業を行うときに、子供の発達段階や実態、ねらいとする道徳的価値や教材の内容に応じて問題解決的な学習を取り入れ、それぞれの指導方法のよさや留意点を踏まえながら、そのよさがより生かされるように、「特別の教科　道徳」の特質を生かした問題解決的な学習の在り方を明らかにする必要があると考えた。

（２）研究の目的

本研究では、「特別の教科　道徳」において、教師がもつ意識を把握し、３つの質の高い指導方法の相互関係に着目しながら、今日まで広く行われてきた自我関与が中心の学習や体験的な学習のよさを継承しつつ、子供がより主体的・対話的に深く学ぶために、「特別の教科　道徳」の特質を生かした問題解決的な学習の在り方を明らかにすることを目的とする。

２．研究の方法

上記のテーマを追究するために、以下の３段階で研究の手順を構想した。

（１）基礎研究…「特別の教科　道徳」の特質と問題解決的な学習に関する考えの押さえ

〇文献をもとに整理し、明らかになった内容をもとに、研究の土台を築く。

（２）調査研究…教師への意識調査を通した実態把握と分析

〇「特別の教科　道徳」と問題解決的な学習に関しての教師の意識を調査し、分析する。

（３）実践研究…授業の構想と実践、その手立て等の検証

〇複数の学習指導案を作成し、授業実践を行い、研究の成果と課題を明らかにする。

３．研究の成果

（１）基礎研究

①　３つの質の高い指導方法に関わる指導論の展開

まず、「評価会議報告」が示す３つの質の高い指導方法（図１）について、以下において、それぞれのよさや課題を検討する。

自我関与が中心の学習	問題解決的な学習	体験的な学習
教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して、道徳的諸価値の理解を深める。	問題解決的な学習を通して、道徳的な問題を多面的・多角的に考え、児童生徒一人一人が生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。	役割演技などの疑似体験的な表現活動を通して、道徳的価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体に解決するために必要な資質・能力を養う。

図１　３つの質の高い指導方法とそのねらい

ア　登場人物への自我関与が中心の学習が重視されてきた意義

道徳の時間の特設に携わった青木孝頼は、道徳的行為を生む動因を図２の６つに大別した。青木（1988）によると、即効性があるのは指示・命令だが持続性が低く、即効性はないが持続性が高いのが態度であり、態度がひとたび形成されると実践には強い持続性が期待できるとし、道徳の時間においては道徳的判断力と道徳的心情を育てることで、道徳的態度の育成を目指すとしている。また、青木は、学校生活の中でこのような場合にはどう行動するべきかなど、子供の道徳的判断力を育てる指導を十分に行っていると指摘した上で、「「判断」に比べ、「心情」面が不十分という現状があるわけですから、「心情」に重点を置いて指導されれば、おのずから、「態度」を養い育てることになる」としたので、道徳の時間では心情を育てることに重点が置かれてきたと考えることができる。この考え方が学校現場に広く浸透し、今日の道徳の時間の指導を行う上での基本的な考え方となり、多くの子供の道徳性を養ってきたと思われる。

指示・命令	模倣	道徳的習慣	道徳的判断	道徳的心情	道徳的態度
高（期待できる）	←――――	即効性	――――→	低（期待できない）	
低（期待できない）	←――――	持続性	――――→	高（期待できる）	

図２　道徳的行為を生む動因とその特徴

しかし、その反面、「懇談会報告」に、単に読み物の登場人物の心情を理解させるだけなどの型にはまったものになりがちであると指摘されたり、諸富（2015）において「これまでの道徳学習の難点は、行動に結びつきにくいことでした。その理由の１つに道徳授業はあくまで道徳的心情の学習なのだ、という固定的なイメージがあった」と指摘されたりするなど、授業の形式化・形骸化や心情理解に止まるといった課題が挙げられている。また、柳沼（2016）においても「従来のように道徳性の情緒的側面（道徳的心情、道徳的実践意欲・態度）にばかり偏らず、認知的側面（道徳的思考力・判断力）や行動的側面（道徳的行動力や習慣）を含め、バランスよく設定する必要がある」と指摘され、道徳的心情のみでなく道徳的判断力を養うことの課題も挙げられている。

イ　授業改善の核となる問題解決的な学習

様々に提唱されている問題解決的な学習の中でも特に注目したいのが赤堀博行、諸富祥

彦、柳沼良太である。赤堀（2016）は「道徳科において問題解決的な学習を取り入れる場合には、子供に考えさせるべき問題を明確にし、自分にはどのようなよさや課題があるのかなどを考え、話し合うことを通して子供一人一人が課題に対する答えを導き出すことが大切である」とし、自我関与が中心の学習のよさを認めつつ、明確な指導観に基づく問題設定や話合い、一人一人の納得解（自分自身が納得できる考え）を重視している。この指導方法は、前述のア自我関与が中心の学習が重視されてきた意義で述べたよさを生かしているものの、同様にその課題にも常に留意していかなければならない。

一方、諸富（2015）は、「多様な価値と情報が溢れる現代社会を生きていくうえでますます必要になってくるのが、そこから自分の生き方を「選びとっていく力」」「「問題解決的な道徳学習」で育てるべき能力は、大人でもどうすればいいのかわからない問題に取り組んでいける力」であり、授業において「「私たち大人でも、いったいどうすればいいかわからなくなり、しかし真剣に考えざるをえないような場面」をこそ、特に小学校高学年以上の道徳授業では取り上げるべきだ」としている。柳沼（2016）も「教材に登場する人物の心情を理解するだけでなく、問題状況を正確に把握し、子どもの生活経験や社会経験と結びつけ、具体的な解決策を考えることも大事になる」とした上で「こうした道徳授業は、その時間だけで完結することなく、事後の教育活動にも関連していく」としている。しかし、これらの指導方法には、合意形成的な手法が子供の価値観の画一化につながることを懸念する声や、指導方法が生徒指導（生活指導）や学級活動の要素と重なるとして指導方法の問題を指摘する声もある。

ウ　道徳的行為に関する体験的な学習への期待

道徳的行為に関する体験的な学習について、本研究では主に江橋照雄らが提唱してきた役割演技を扱うこととした。諸富（2015）は役割演技が「子どもが楽しく、イキイキと授業にのってくるようになる」上で、「現代の子どもにどうしても必要な二つの力、①自己肯定感を育てる（自分を好きな子どもを育てる）②子どもの人間関係の力を育てる」としながら、「ねらいとする価値に「体験的に」（身をもって）迫ることができるのです。観念ではなく、体験によって、からだごとリアルに実感しながら学んだ道徳的価値だからこそ、生活のなかで生きたものになっていきます」と、道徳的実践力の高まりが期待できることを指摘している。

また、授業における有効性について、早川（1998）は「①価値葛藤が起こる場面を取り入れた話し合いの授業②モラルジレンマ授業③ロール・プレイングによる授業の３つを、道徳の効果的な指導方法として考えた。その中でも、特にバーバルとノンバーバルの両方を含んだロール・プレイングによる授業効果が一番期待できると考察」している。

その反面、一部の教師からは、役割演技が子供の遊びになってしまい、指導方法の効果が得られにくいとの懸念も聞かれる。

②　問題解決的な学習を軸とした関連的な構想の必要性

３つの質の高い指導方法について検討していくと、自我関与が中心の学習や体験的な学習は、子供に自分事として考えさせることをはじめとして、問題解決的な学習に通じるものがあることが分かる。また、３つの質の高い指導方法それぞれによさがあるが、課題があることも見えてきた。そこで、それぞれのよさを組み合わせたり、課題を補完したりできる多様なスタイルを生み出し、授業に生かすことが必要であると考えた。

（２）調査研究

実際に授業を行う教師が「特別の教科　道徳」や問題解決的な学習について、どのように捉えているのかを把握するために、質問紙調査を行った。

①　調査の実施概要

名称：「特別の教科　道徳」に関するアンケート（図３）

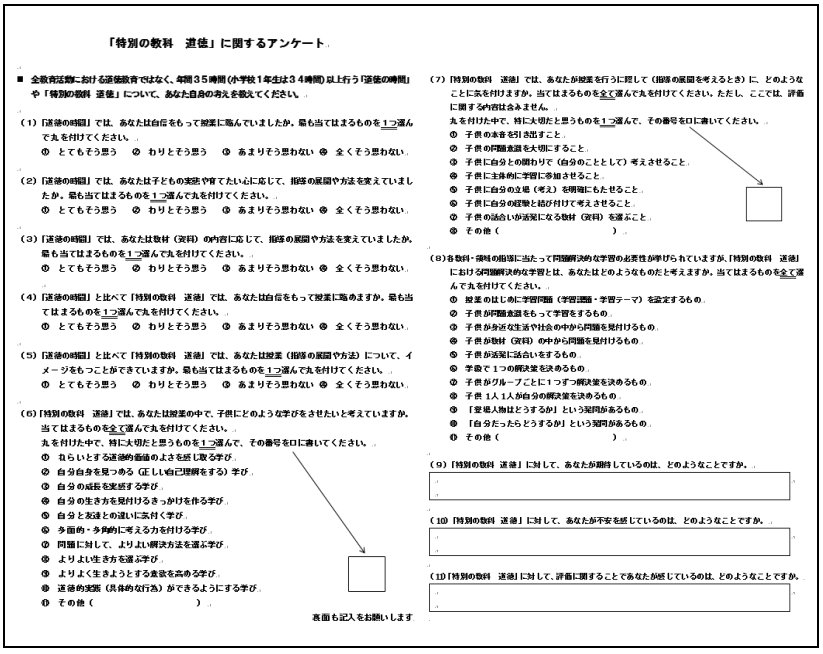
対象：平成 29 年度東京都内の道徳教育研究推進校の道徳教育推進教師

目的：東京都の道徳教育研究推進校における道徳教育推進担当者の道徳授業についての問題意識や課題等を明らかにする。

配布数：114 部
　　小学校 63 部
　　中学校 51 部

期間：2017 年
　　8 月 1 日～31 日

回収率：77.2%
　　（114 校中 88 校）
　　小学校 79.4%
　　（63 校中 50 校）
　　中学校 74.5%
　　（51 校中 38 校）



「特別の教科　道徳」に関するアンケート

■ 全教育活動における道徳教育ではなく、年間３５時間（小学校１年生は３４時間）以上行う「道徳の時間」や「特別の教科 道徳」について、あなた自身の考えを教えてください。

（１）「道徳の時間」では、あなたは自信をもって授業に臨んでいましたか。最も当てはまるものを１つ選んで丸を付けてください。
① とてもそう思う　② ややそう思う　③ あまりそう思わない　④ 全くそう思わない

（２）「道徳の時間」では、あなたは子どもの実態や育てたい心に応じて、指導の展開や方法を変えていましたか。最も当てはまるものを１つ選んで丸を付けてください。
① とてもそう思う　② ややそう思う　③ あまりそう思わない　④ 全くそう思わない

（３）「道徳の時間」では、あなたは教材（資料）の内容に応じて、指導の展開や方法を変えていましたか。最も当てはまるものを１つ選んで丸を付けてください。
① とてもそう思う　② ややそう思う　③ あまりそう思わない　④ 全くそう思わない

（４）「道徳の時間」と比べて「特別の教科 道徳」では、あなたは自信をもって授業に臨めますか。最も当てはまるものを１つ選んで丸を付けてください。
① とてもそう思う　② ややそう思う　③ あまりそう思わない　④ 全くそう思わない

（５）「道徳の時間」と比べて「特別の教科 道徳」では、あなたは授業（指導の展開や方法）について、イメージをもつことができていますか。最も当てはまるものを１つ選んで丸を付けてください。
① とてもそう思う　② ややそう思う　③ あまりそう思わない　④ 全くそう思わない

（６）「特別の教科 道徳」では、あなたは授業の中で、子供にどのような学びをさせたいと考えていますか。当てはまるものを全て選んで丸を付けてください。
丸を付けた中で、特に大切だと思うものを１つ選んで、その番号を□に書いてください。
① ねらいとする道徳的価値のよさを感じ取る学び
② 自分自身を見つめる（正しい自己理解をする）学び
③ 自分の成長を実感する学び
④ 自分の生き方を見付けるきっかけを作る学び
⑤ 自分と友達との違いに気付く学び
⑥ 多面的・多角的に考える力を付ける学び
⑦ 問題に対して、より良い解決方法を選ぶ学び
⑧ よりよい生き方を選ぶ学び
⑨ よりよく生きようとする意欲を高める学び
⑩ 道徳的実践（具体的な行為）ができるようにする学び
⑪ その他（　　）

裏面も記入をお願いします

（７）「特別の教科 道徳」では、あなたが授業を行うに際して（指導の展開を考えるとき）に、どのようなことに気を付けますか。当てはまるものを全て選んで丸を付けてください。ただし、ここでは、評価に関する内容は含みません。
丸を付けた中で、特に大切だと思うものを１つ選んで、その番号を□に書いてください。
① 子供の本音を引き出すこと。
② 子供の問題意識を大切にすること。
③ 子供に自分との関わりで（自分のこととして）考えさせること。
④ 子供に主体的に学習に参加させること。
⑤ 子供に自分の立場（考え）を明確にもたせること。
⑥ 子供に自分の経験と結び付けて考えさせること。
⑦ 子供の話合いが活発になる教材（資料）を選ぶこと。
⑧ その他（　　）

（８）各教科・領域の指導に当たって問題解決的な学習の必要性が挙げられていますが、「特別の教科 道徳」における問題解決的な学習とは、あなたはどのようなものだと考えますか。当てはまるものを全て選んで丸を付けてください。
① 授業のはじめに学習問題（学習課題・学習テーマ）を設定するもの。
② 子供が問題意識をもって学習をするもの。
③ 子供が身近な生活や社会の中から問題を見付けるもの。
④ 子供が教材（資料）の中から問題を見付けるもの。
⑤ 子供が話合いをするもの。
⑥ 学級で１つの解決策を決めるもの。
⑦ 子供がグループごとに１つずつ解決策を決めるもの。
⑧ 子供１人１人が自分の解決策を決めるもの。
⑨ 「登場人物はどうするか」という発問があるもの。
⑩ 「自分だったらどうするか」という発問があるもの。
⑪ その他（　　）

（９）「特別の教科 道徳」に対して、あなたが期待しているのは、どのようなことですか。

（10）「特別の教科 道徳」に対して、あなたが不安を感じているのは、どのようなことですか。

（11）「特別の教科 道徳」に対して、評価に関することであなたが感じているのは、どのようなことですか。

図３　「特別の教科　道徳」に関するアンケート用紙

②　調査結果の概要

調査結果は図４に示す通りである。

まず、問１～５の結果から分かるように、教師は子供の実態や教材等に応じて指導の展開や方法を変えている割合は高いにもかかわらず、自信をもって授業に臨む割合が低くなる。同様のことが、「特別の教科　道徳」の授業のイメージがある割合は高いにもかかわらず、自信をもって授業に臨む割合が低くなることにも当てはまる。教師が子供の実態よりも教材の内容に応じて指導の展開や方法を変えることも、調査結果から明らかになった。

問６は、授業の中で子供にさせたい学びについての結果である。学習指導要領に示されたキーワードである自分自身を見つめ、多面的・多角的に考え、よりよく生きようとする意欲を高める学びが求められていることが分かる。項目⑦、⑧は「選ぶ」、項目③、⑩は「行為や変容を求める」ところに違和感があるために数値が低いと思われるが、４０～５０％の教師はこれらの学びをさせたいとも考えており、必要性を感じている教師もいることが分かる。

問７は、授業で気を付けることについての結果である。問６と同様に、学習指導要領に示されたキーワードである自分との関わりで考えさせ、主体的に学習に参加させたいと教師が考えていることが分かる。項目②は小学校が約２５％、項目⑥は小学校が約１２％、項目⑦は中学校が約３１％高くなり、小学校と中学校で差が見られた。項目⑦が小学校で低いのは、特に小学校段階では教材選びよりも、教科書の中の教材を扱うとき、その教材をどのよ

うに活用するかに力を入れているからだと考えられる。

問８は、「特別の教科　道徳」における問題解決的な学習のイメージについての結果である。項目①が平均約３０％と低いのは、学習問題は子供ではなく、教師が設定するというイメージが強いからだと考えられる。項目⑥、⑦よりも項目⑧の数値が高いところが特に顕著であり、学習では追究が中心、解決は行為で表すという考え方の表れであると考えられる。項目③、④は中学校が約１６％、約１１％高く、小学校よりも中学校の方が学習問題を子供に考えさせたいと教師が考える傾向があることが明らかになった。

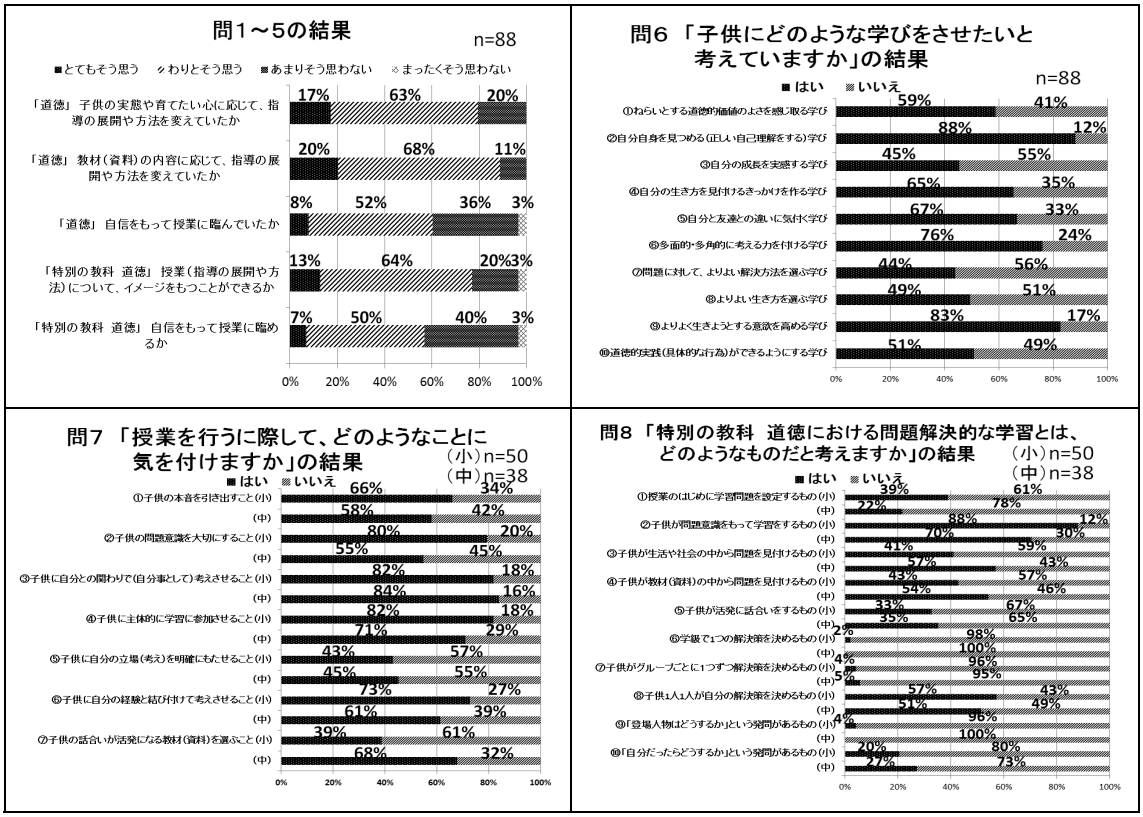


図４　「特別の教科　道徳」に関するアンケートの結果

③　調査結果に基づく実践の方向性と方策の柱

この調査結果・考察に基づき、「特別の教科　道徳」の特質を生かした問題解決的な学習の方向性や方策・手立てとして、次の４つが浮かび上がった。

ａ）教材開発ではなく、指導方法の組み立てへの焦点化…教師は教科書以外の教材を探すより、教科書の教材をどのように活用するかを考える実態がある。そこで、教材開発の研究ではなく、教科書の教材を活用してどのような授業を行うかに研究の焦点を当てる。

ｂ）指導方法選択の明確化…教師は授業のイメージはあっても、よい授業をする自信があまりない。そこで、子供の実態をもとに、子供に育てたい心や身に付けさせたい力を考えた上で、それに合わせた問題解決的な学習の取り入れ方を示すことで、教師が指導方法に確信をもち、安心して授業に臨めるようにする。

ｃ）子供の問題意識と納得解の重視…子供が問題意識をもって学習し、一人一人が自分の納得できる答えを考えることが求められている。そこで、子供の意識から学習問題を作り、授業で問題の追求をし、子供が納得解を考える学習を行う。

ｄ）子供の発達段階に応じた指導方法の応用…中学校の方が学習問題を子供に考えさせたいと教師が考える傾向がある。心情だけでなく判断力をねらうなど、発達段階に応じて指導方法を変え、学年が上がるほど学習問題を子供に考えさせたり、判断力を養ったりする。

（３）実践研究

調査研究の結果から導かれた実践の方向性と方策をもとに、実践研究を次のように構想・計画した。

①　授業の構想と検証授業の実施計画

まず、授業実践の構想を図５上段のように考えた。学習指導要領に示されている内容、児童の実態、社会の要請・時代の流れをもとに、ねらいとする道徳的価値に照らして子供に育てたい心・身に付けさせたい力を考え、教材を活用しながら、教師が考えさせたいこと・子供が考えたいことが重なるように授業の中心を決める。その上で、自我関与が中心の学習、問題解決的な学習、体験的な学習のそれぞれのよさが生かされる学習となるように、「特別の教科　道徳」の特質を生かした問題解決的な学習の授業を構想する。

授業スタイルの設計構想

4つの授業スタイルの実施計画

	スタイルⅠ	スタイルⅡ	スタイルⅢ	スタイルⅣ
学級①	教材A（内容項目A）	教材B（内容項目B）	教材C（内容項目C）	教材D（内容項目D）
学級②	教材D（内容項目D）	教材A（内容項目A）	教材B（内容項目B）	教材C（内容項目C）
学級③	教材C（内容項目C）	教材D（内容項目D）	教材A（内容項目A）	教材B（内容項目B）
学級④	教材B（内容項目B）	教材C（内容項目C）	教材D（内容項目D）	教材A（内容項目A）

図５　授業の構想と検証授業の実施計画

授業で扱う教材は、学習指導要領が示す４つの内容項目（Ａ～Ｄ）から偏りがないように１つずつ選び、「命の重さはみな同じ」（東京書籍）、「キャプテンとして」（東京書籍）、「夏の日のこと」（文部科学省　道徳読み物資料集）、「心のししゅう」（日本文教出版）とした。

以上の構想をもとに、図５下段のように授業を計画し、具体的に実施した。これは、４学級に対して４教材を活用し１６回の授業を行うことで、全学級に全スタイルで授業を実施でき、研究の結果に公平さが期待できると考えたためである。

上記の構想・計画をもとに、2017 年 12 月に東京都公立Ａ小学校５・６年各２学級（５年生 48 人、６年生 54 人）で検証授業を実施した。各検証授業後に、授業分析と子供に対して質問紙による自己評価を行い、それぞれの指導方法の成果と課題を分析した。

②　検証授業の実施と分析

ア　授業の実践概要と分析１

ａ　授業群①「命の重さはみな同じ」（Ｄ：生命の尊さ）の実践

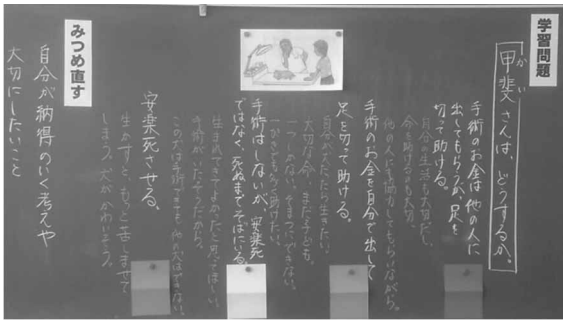
それぞれの検証授業の実施概要と結果を整理すると、以下の通りである。

スタイルⅠ　「問題解決的な学習」の実践概要

授業展開と発問の骨子

1．命について思い起こす。
○命とは、どのようなものか。
2．教材文（前半）を読んで話し合う。
○甲斐さんはどんなことで迷っているか。
学習問題　甲斐さんはどうするか。
◎甲斐さんはどうするか。
○医者や職員は、どんな気持ちだったか。
3．考えを整理し、自分なりの答えをもつ。
○自分が納得のいく考えや大切にしたいことは、どんなことか。
4．本時の学習を振り返る。
○黒板を見ながら、今日の学習を振り返ろう。

中心発問に関わる板書（一部）



中心発問での話合いの様子（要旨）

・怪我が治らなくても生きる方が大切で、子犬にとっても幸せだ。
・安楽死はひどい。安楽死はする方もされる方も心が苦しい。
・自分が犬だったら、少しでも生きたい。
・子犬も大切な命をもっているから、殺すのはかわいそう。
・生き物はいつか死ぬ。痛みや苦しみが続くなら、安楽死で早く苦しみを終わらせてあげたい。苦しみながら死ぬのは嫌だ。
・命は1つしかないから、粗末にできない。
・死ぬまでそばにいることで生まれてきてよかったと思ってほしい。
・他の犬は安楽死させるのに、この犬だけ特別扱いしてよいのか。
・他の犬も手術すると、手術代が増えて自分が生活できなくなる。
・命はお金で買えない。限界はあるが、1匹でも多く助けたい。
・もし、自分が助けてもらえない1匹になったら悲しい。
・自分のお金だけでは足りなくなるから、他の人にも協力してもらい、寄付などでお金を集めて手術をしたい。

子供の納得解部分のノート記述（例）

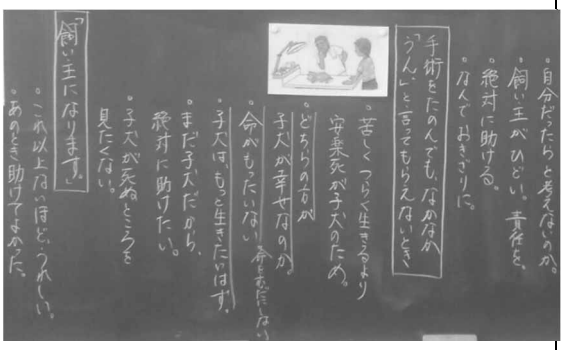
・命は1つしかない。だから大切に、精一杯生きる。それが大切だなと思いました。
・どれだけ小さい命でも、親が大切にしてがんばって生んでくれたから、命を大切にする。この瞬間は一度だけしかないのだから、命を大切にしたい。
・悲しいことがあっても、そこに命がある限り、何度でも幸せになれると思いました。
・1つでも多く、大切な命を助ける。自分も、ほんの少しのことだとしても、命を助けたい。
・命は1人1つ、1匹1つだから、長く生きてほしいし、幸せになってほしい。
・生き物は虫でも植物でも動物でも命があり、思いを通わせる心があるから、1人1人の思いを感じて接することが大切だと思う。
・私の将来の夢は獣医なので、今回の授業はとてもためになった。けれど、この話に出てきた獣医さんを、私は情けない人だと思う。手術をすれば助かるかもしれないのに、安楽死をすすめるのは情けないと思う。

スタイルⅡ　「問題解決的な学習＋自我関与が中心の学習」の実践概要

授業展開と発問の骨子

1．命について思い起こす。
○命とは、どのようなものか。
学習問題　命を大切にすることができるのは、どのような考えや思いがあるからか。
2．教材文（全部）を読んで話し合う。
○けがをしている子犬を見たとき、甲斐さんはどんな気持ちだったか。
◎手術を頼んでも、なかなか「うん」と言ってもらえないとき、甲斐さんはどんな気持ちだったか。
○「私たちが飼い主になります」と言われたとき、甲斐さんはどんな気持ちだったか。
○自分が納得のいく考えや大切にしたいことは、どんなことか。
3．自分の経験を振り返る。
○今までに、命を大切にしてきたことはあるか。
4．本時の学習を振り返る。
○黒板を見ながら、今日の学習を振り返ろう。

中心発問に関わる板書（一部）



中心発問での話合いの様子（要旨）

・苦しく辛く生きるよりも、苦しまずに安楽死させてあげたい。
・どちらの方が子犬が幸せになれるのか。
・治せない怪我で死んでしまう犬がいるのに、治せるのに治さないのは、命がもったいない。
・犬も生きているから感情があるはずで、うれしいとか、もっと生きたいとか、言葉にできないだけで思っているのではないか。
・犬にとっては人間以上に足が生活に必要だから、失ったらかわいそうだ。
・まだ子犬なんだから絶対に助けてあげたい。
・この子犬が死ぬのを見たくない。

子供の納得解部分のノート記述（例）

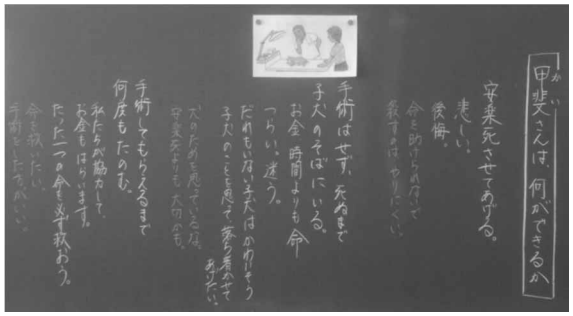
・1つしかない命を大切にしたい。
・命を無駄にしない。
・誰にとっても大切な命で、生きることのできる時間は限りがあるので、無駄にしないように行動したい。
・1つしかない自分だけの命をすぐに捨てようとせずに、無駄にしないようにすることが大事。
・自殺などをする人は両親の気持ちなどを考えてないと思う。1つしかない命を大切に。
・生きたくても生きることができない人もいるので、それを考えると命を大切にできると思う。命がもったいない。
・病気や食べ物がなく、10歳未満で死んでしまう子供たちが多いことを知ったので、ユニセフ募金をして少しでも多くの命を助けたいと思う。
・鳥やうさぎを飼っているので、後悔しないように、死ぬときに幸せだったよねと思えるようにしたい。

スタイルⅢ　「問題解決的な学習＋体験的な学習」の実践概要

授業展開と発問の骨子

1．命について思い起こす。
○命とは、どのようなものか。
2．教材文（前半）を読んで話し合う。
○甲斐さんはどんなことで迷っているか。
学習問題　甲斐さんは何ができるか。
◎甲斐さんは何ができるか。考えたことを演じよう。
○演技を見て、感じたことや考えたことを話し合おう。
3．考えを整理し、自分なりの答えをもつ。
○自分が納得のいく考えや大切にしたいことは、どんなことか。
4．本時の学習を振り返る。
○黒板を見ながら、今日の学習を振り返ろう。

中心発問に関わる板書（一部）



中心発問での話合いの様子（要旨）

・できれば治療してあげたいが、子犬にとって安楽死の方が楽なら、安楽死させてあげた方がよい。
・手術にはお金とか時間もかかるから、安楽死させた方がよい。
・治療したら足が切られて子犬が走れなくなり、その子が辛くなる。
・死ぬ方が辛い。子犬だから、もっと生きてほしい。
・助けてあげたい気持ちがあるのだから、きっと後で後悔する。
・生き物の命を殺すのは、やりにくい。
・子犬のそばで死ぬまで寄り添うことで、天国へ行ってほしい。
・助かる確率があるから助ける。お金や時間は関係ない。
・誰もいないところで死を待つよりも、誰か1人でもそばにいてあげる。子犬も落ち着かない。できることは、それしかない。
・犬にだって命があるから、人間と一緒だ。足がなくなったとしても、人間と同じように助けるべき。
・たった1つしかない命がなくなることは、相当重要なことだ。
・手術代は私たちがみんなで協力して集めて出せばよい。

子供の納得解部分のノート記述（例）

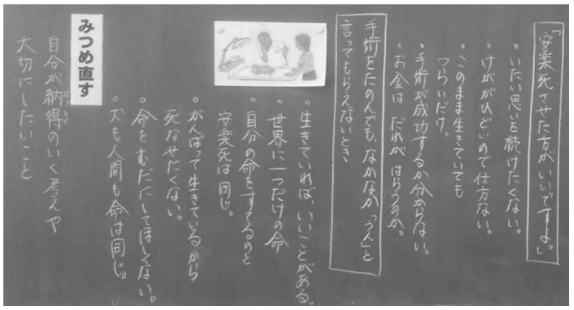
・たった1つしかない命を必ず救う。これからは自分の命や人の命の重さを感じ、命を大切にしたいです。
・命は世界にたった1つしかないものだから、どんな生き物でも、できる限り力を尽くしてあげたいと思う。
・命はお金では買えないくらい大切なものだから、お金がいくらかかったって助けてあげたい。
・命は時間やお金よりも大切。命はたった1つしかなく、最も重要なものだから、どんなことよりも命は大切。
・生き物の命を人間の勝手で殺してはいけない。命を軽いものだと思わず、どんな命も対等な立場として考えていくことが大切だと思います。
・日本では動物の安楽死を多く行っているけど、殺す方も殺される方も悲しむから、安楽死させずに最期まで見届けたい。
・「たった1つの命だから」と説得しているところがすごいと思った。「人間と同じように」という台詞も心に残った。
・3人とも意見は違っているけど、子犬のためを思ってしているから間違っていないので、私が甲斐さんの立場だったらどうしているんだろうと真剣に考えた。

スタイルⅣ　「問題解決的な学習＋自我関与が中心の学習＋体験的な学習」の実践概要

授業展開と発問の骨子

1．命について思い起こす。
○命とは、どのようなものか。
学習問題　命を大切にするには、どのような考えや思いが大切なのか。
2．教材文（全部）を読んで話し合う。
○けがをしている子犬を見たとき、甲斐さんはどんな気持ちだったか。
○獣医さんはどのような気持ちから安楽死を進めたのか。
◎手術を頼んでも、なかなか「うん」と言ってもらえないとき、甲斐さんはどうするか、演じてみよう。
3．考えを整理し、自分なりの答えをもつ。
○自分が納得のいく考えや大切にしたいことは、どんなことか。
4．本時の学習を振り返る。
○黒板を見ながら、今日の学習を振り返ろう。

中心発問に関わる板書（一部）



中心発問での話合いの様子（要旨）

・子犬に痛い思いを続けさせたくない。
・怪我がひどいから安楽死は仕方がない。
・辛い思いをさせ続けて子犬のためにならなくてかわいそう。
・この子犬だって命があるのに、かわいそう。
・痛い思いをして生きていてもいいことがなく、辛いだけだ。
・手術をしないと死んでしまう。放っておけるのか。
・手術するとしたら、お金は誰が払うのか。
・お金なら自分が払う。
・死んだら何もできないが、生きていればいいことがある。
・世界に1つだけの命だから、自分の命を捨てるのと同じだ。
・がんばって生きているのに安楽死させるのはかわいそう。
・子犬が死にたいと言っているわけではない。
・人間と犬の命は同じものだ。

子供の納得解部分のノート記述（例）

・命はすぐそばにあって、尊いものだから大切にしたい。
・たった1つの命をもらったぼくたち。そのことを忘れずに大切に生きていこう。命を失った人たちのためにも、自分たちがその分生きていこう。
・私は今まで生きていることが当たり前だと思ってしまうときが多かったけど、生きていることが幸せなんだなと思った。命のありがたみが分かった。これからこの命を大切に生きていこうと思った。
・生きていればいいことがあるから、命がある限り大切にして、時間を無駄にしない。
・命は一度なくせば二度と取り戻すことはできない。だから生きることをもう無理だと決めてしまうことは殺人と同じだ。
・どんな動物でも命は大切なもの。だからどんなに小さくても人間と同じ命。

b　授業群①の分析

これらの４つのスタイルによる授業を、授業の逐語記録、子供のノート記述、板書、子供の自己評価の結果をもとに比較・分析すると、特に以下に示す傾向が見られた。

スタイルⅠ…考えの違いに注目するようになり、意見の対立が起こって話合いがより活発になる。

スタイルⅡ…発言の中に互いの考えを理解し合ったり認め合ったりする言葉が多くなり、親和的な認め合いが見られる。

スタイルⅢ…友達の演技を複数見る中で自分の考えをより明確にし、根拠が明確で強い意志を伴う内容が多くなる。

スタイルⅣ…友達の演技を見る中で自分の考えをより明確にし、演者の台詞よりも仕草や表情に注目するようになる。

イ　授業の実践概要と分析２

他の検証授業を比較・分析した結果、上記の特色が顕著に見られた例を以下に示す。

a　授業群②「キャプテンとして」（Ｃ：よりよい学校生活、集団生活の充実）の実践

スタイルⅢ　授業展開と発問の骨子

1．自分の役割を思い起こす。
○自分にはどのような役割があるか。
2．教材文（前半）を読んで話し合う。
○ぼくはどんなことで迷っているか。
学習問題　キャプテンとして何ができるか。
◎ぼくは何ができるか。考えたことを演じよう。
○演技を見て、感じたことや考えたことを話し合おう。
3．考えを整理し、自分なりの答えをもつ。
○自分が納得のいく考えや大切にしたいことは、どんなことか。
4．本時の学習を振り返る。
○黒板を見ながら、今日の学習を振り返ろう。

本授業では、３回の役割演技を行う中で、子供は「キャプテンとして強く注意する」→「自分がしてほしいことを伝え、相手がしたいことも聞く」→「自分が率先して行動して手本となる」と、学級全員でよりよい解決を作り上げていき、根拠が明確で強い意志を伴う内容が多くなる傾向が見られた。

b　授業群③「夏の日のこと」（Ｂ：親切、思いやり）の実践

スタイルⅣ　授業展開と発問の骨子

1．親切な行為を思い起こす。
○親切な行いには、どんなものがあるか。
学習問題　親切にするには、どのような考えや思いが大切なのか。
2．教材文（全部）を読んで話し合う。
○照りつける太陽の中、汗だくで仕事をしているとき、わたしはどんな気持ちだったか。
○頭からみそをかぶってしまい、立ちすくんだとき、わたしはどんな気持ちだったか。
◎怒りに震え、立ちすくんでいるわたしを見たとき、おじさんはどうするか、演じてみよう。
3．考えを整理し、自分なりの答えをもつ。
○自分が納得のいく考えや大切にしたいことは、どんなことか。
4．本時の学習を振り返る。
○黒板を見ながら、今日の学習を振り返ろう。

本授業では、「怒っているから怖くて、手を出してくるかもしれない」「何であんなに怒ったのか不思議」「気持ちをコントロールできていない」など、演者の台詞よりも仕草や表情に注目した発言が多くなり、「放っておけないから何とか力になりたい」という考えが多くなる傾向が見られた。

c　授業群④「心のししゅう」（Ａ：正直、誠実）の実践

スタイルⅠ　授業展開と発問の骨子

1．正直な行為を思い起こす。
○正直にできたこと、うそをついたり、ごまかしたりしたことはあるか。
2．教材文（前半）を読んで話し合う。
○まり子はどんなことで迷っているか。
学習問題　まり子はどうするか。
◎まり子はどうするか。
○みずえや先生、家族はどんな気持ちだったか。
3．考えを整理し、自分なりの答えをもつ。
○自分が納得のいく考えや大切にしたいことは、どんなことか。
4．本時の学習を振り返る。
○黒板を見ながら、今日の学習を振り返ろう。

本授業では、子供の考えは「作品をそのまま出す」「家族に相談する」「簡単なものに作り変える」「初めから作り直す」「作品は出さない」という５つに分かれ、それらの行為の背景にある気持ちを話し合う中で、意見の対立が起こって話合いがより活発になる傾向が見られた。

ウ　実施結果の分析

検証授業直後、授業を受けた子供（５年生 48 人、６年生 54 人）に質問紙による自己評価を行った。その自己評価の質問紙とその結果を図６に示す。

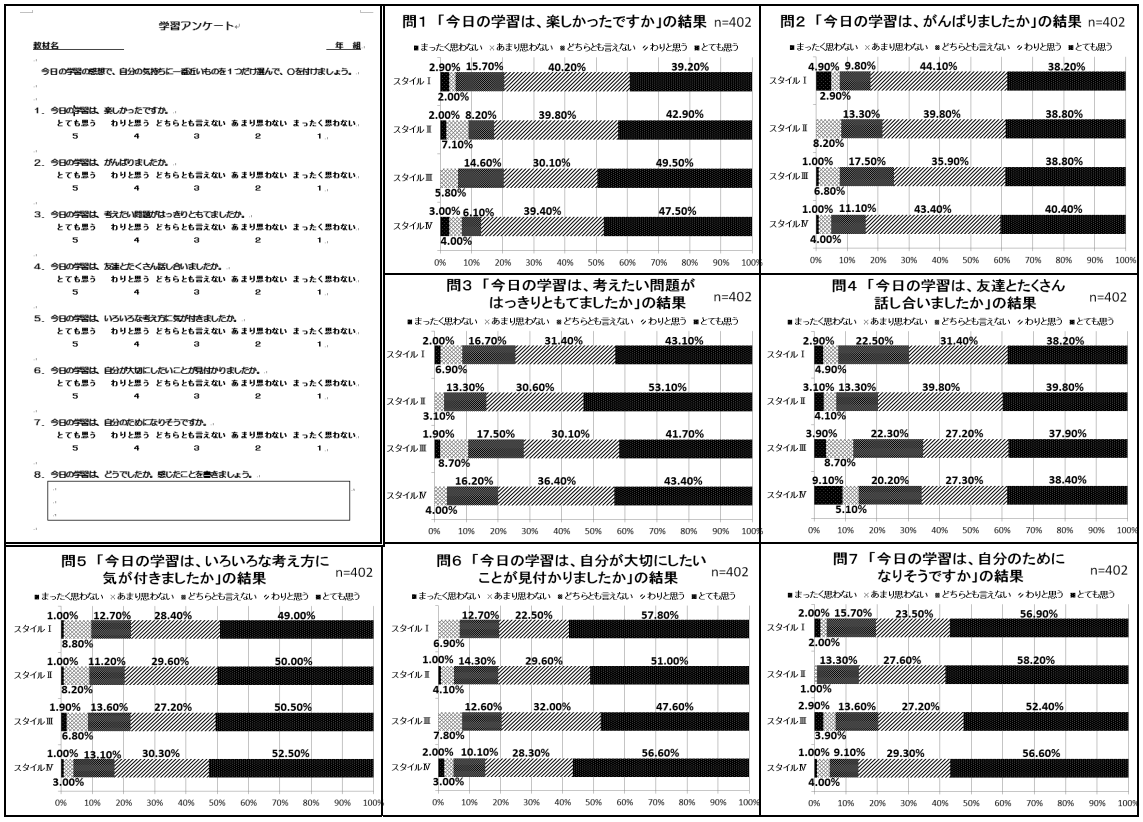


図６　自己評価の質問紙（左上）とその結果

結果を総じて見ると、スタイルⅠ～Ⅳのいずれの授業についても子供が肯定的に答える割合が高く、それぞれが子供に学ぶ意味がある授業だと受け止めることができ、問題解決的な学習の効果があったと考える。スタイルⅢ・スタイルⅣは、子供が意欲・関心をより高くもって授業に参加しており（問１）、体験的な学習を楽しいと感じている。また、スタイルⅡは考えたい問題をよりはっきりもちながら学習を進めており（問３）、話合いがねらいとする道徳的価値から外れにくいので肯定的に答える割合が高いのではないかと考える。

４．まとめと課題

（１）研究のまとめ

本研究全体として明らかになったのは、以下の３点である。

ａ）問題解決的な学習を軸とした授業は「特別の教科　道徳」の実施課題に対応できる

子供の意識から学習問題を設定し、話合いを通して納得解を考えさせる本研究の授業は、合意形成で価値観を押し付けるのではなく納得解を考えさせながら問題解決的に取り組ませることで、前述の課題に対応していた。「特別の教科　道徳」に問題解決的な学習を効果的に取り入れることで、子供の主体的・対話的で深い学びが様々な形で促される。

ｂ）本研究の問題解決的な学習を軸とした４つのスタイルには、それぞれによさがある

４つのスタイルは、特定の指導方法が効果的であるという差は見られず、それぞれに特徴の違ったよさが見られた。スタイルⅠでは考え方の対立を含む活発な話合い、スタイルⅡで

は自我関与のよさを特に生かした多様な価値観の親和的な認め合い、スタイルⅢ、Ⅳではノンバーバルな肌感覚の実感を含めた気付きと話合いが特徴的であった。また、スタイルⅠ、Ⅲは永田（2016）に示されている投影的・批判的な思考が多く、スタイルⅡ、Ⅳは共感的・分析的な思考が多く見られた。

ｃ）質の高い指導方法を組み合わせることで授業がより活性化する

問題解決的な学習を軸として、様々な指導方法を組み合わせた授業を並行させ、共存させることで相乗効果が生まれ、授業そのものや、子供の授業に対する意識が活性化する。どの指導方法が一番よいかという視点ではなく、問題解決的な学習を軸とした多彩な組み立ての授業そのものが、教師にとっても子供にとっても授業の活性化を促す。

（２）研究の課題

しかし、課題も残されている。１つは、３つの質の高い指導方法に着目して研究したが、実際には指導方法はこの３つに閉じられるものではなく、さらに多様に開かれるものである。３区分に頼らない、柔軟な指導方法に基づく研究の可能性がある。もう１つは、子供の道徳性に係る評価と重ねて授業検討を行う研究の可能性である。問題解決的な学習のよさがさらに生かされるように、今後も検証していくことが課題である。

５．参考文献

道徳教育の充実に関する懇談会(2013)「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告)」文部科学省
中央教育審議会(2014)「道徳に係る教育課程の改善等について（答申)」文部科学省
道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議(2016)「「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告)」文部科学省
青木孝頼(1988)『道徳でこころを育てる先生』図書文化
青木孝頼(1995)『道徳授業の基本構想』文溪堂
赤堀博行、杉田洋(2012)『道徳・特別活動の本質　青木理論とその実践』文溪堂
赤堀博行(2016)『これからの道徳教育と「道徳科」の展望』東洋館
板橋雅則(2015)『道徳授業における「問題解決学習」の実践史的考察』東洋大学
江橋照雄(1992)『授業が生きる役割演技』明治図書
永田繁雄(2016)『平成 28 年版 小学校新学習指導要領の展開 特別の教科 道徳編』明治図書
永田繁雄(2017)『小学校新学習指導要領ポイント総整理 特別の教科 道徳』東洋館
早川裕隆(1998)「ロール・プレイングによる道徳の授業の実証的研究－「道徳の時間」の指導方法の比較検討を中心にして－」上越教育大学大学院
諸富祥彦(2015)『「問題解決学習」と心理学的「体験学習」による新しい道徳授業』図書文化
柳沼良太(2016)『問題解決的な学習で創る道徳授業超入門』明治図書